官版

佛蘭西法律書

治罪法

東京圖書館

新門	函 一 四
一一部	架 二
類	號 八九九四

CF2
3
07

一 共五本

CF2
3
07

東京帝國圖書館藏

TOKIO LIBRARY
FOUNDED BY MONBUSHO 1872

佛蘭西法律書 治罪法第二

權大内史箕作麟祥 譯

明治九年文部省交付

○第二篇 裁判所ノ事

○第一卷 警察裁判所ノ事 即チ註誤裁判所ト軽罪裁判所トヲ總テ云フ

定同月廿九日布告 (千八百八年十一月十九日決)

○第一章 註誤裁判所ノ事

第百三十七條 刑法第四篇ノ規則ニ循ヒ十五

「フラン」以下ノ罰金又ハ五日以下ノ禁錮ノ刑ヲ以テ罰ス可キ罪犯ヲ註誤（即チ警察違背ノ罪）ト看做ス可シ但シ差押ヘタル物件ヲ官ニ没収スルノ有無ト其物件ノ價ノ多少トヲ論スルヿナシ

第百三十八條　註誤ノ罪ハ後ノ數條ニ記スル所ノ規則ト差別トニ循ヒ治安裁判役及ヒ邑長之ヲ裁判ス可シ

○第一款　治安裁判役註誤罪ノ裁判ヲ為ス事

第百三十九條　左ノ諸件ハ治安裁判役ノミ之ヲ裁判ス可キ特權アリ（邑長ニハ其權ナキヲ云フ）

第一　縣ノ首邑内ニテ犯シタル註誤

第二　縣ノ首邑ニ非サル邑内ニ於テ犯シタル註誤（但シ犯人其邑内ニ住居セサル時ニ限ル可ク犯人現ニ註誤ノ罪ヲ行ヒ名捕ヘラレタル時ハ別段ナリトス（第百六十六條見合）

第三　註誤ノ罪犯ノ為メ損害ヲ受ケシ者高ノ定マラサル償又ハ十五「フラン」以

上ノ償ヲ得ント要ムル場合

第四　平民ノ申立ニ因リ訴フル（檢察官ヨリ訴フ）所ノ森林ニ管シタル註誤

第五　言詞ヲ以テ人ニ害ヲ加ヘタル罪（註誤）

第六　風俗ヲ亂ル可キ書畫ヲ貼附シ又ハ（時ニ限ル）公布シ又ハ賣拂ヒ又ハ配分スル罪（註誤ノ時ニ限ル）

第七　卜筮又ハ占夢ヲ業ト為スノ罪

第百四十條　又治安裁判役ハ前條ニ記シタル所ノ外自己ノ管轄地内ニテ犯シタル總テノ註誤ヲ邑長ト同シク裁判スルノ權アリ（第百六十六條見合）

第百四十一條　治安裁判役一負ノミナル地縣ノ云フニ於テハ其裁判役一人ニテ註誤裁判ノ事務ヲ執行フ可シ又治安裁判所ノ書記官及ヒ使吏ハ註誤裁判所ノ書記官及ヒ使吏ノ職ヲ兼ヌ可シ

第百四十二條　治安裁判役二人以上アル地ニ於テハ其中ノ最モ先キニ任ヲ得タル者ヲ以

テ初メトシ次第ニ順序ヲ逐ヒ交代シテ註誤裁判役ノ職ヲ行フヲ可シ但シ此場合ニ於テハ註誤裁判所ノ書記官一員ヲ別段定ム可シ

第百四十三條　又前條ノ場合ニ於テハ註誤裁判所ヲ分テ二局ト為シ治安裁判役一員各其局ノ事務ヲ掌ルヿヲ得可シ但シ此場合ニ於テハ書記官ノ補役トシテ書記一員ヲ任スルヿヲ得可シ

第百四十四條　註誤裁判所ノ檢察官ノ職務ハ其裁判所所在ノ地ノ邏卒長之ヲ行フヲ可シ若シ邏卒長ニ差支アル時又ハ其地ニ邏卒長ノアラサル時ハ邑長又ハ其輔佐之ニ代テ檢察官ノ職ヲ行フヲ可シ

又邏卒長數人アル時ハ控訴院ノ檢事長ノ命ニ因リ其數人中ニテ檢察官ノ職ヲ行フヲ可キ者ヲ定ム可シ

第百四十五條　註誤ノ罪ヲ犯シタルニ付テノ呼出ハ檢察官ノ求メ又ハ其註誤ノ為メ損害ヲ受ケタル者ノ求メニ因リ之ヲ為ス可シ

其呼出狀ハ使吏之ヲ送達シ被告人又ハ被告

人ノ為メ責ニ任ス可キ者民法第千三百八十四條見合ニ其呼出狀ノ寫ヲ渡シ置ク可シ

第百四十六條　其呼出狀ノ期限ハ二十四時ヨリ少ナカル可カラス又被告人遠地ニアル時ハ三「ミリアメートル」毎ニ一日ノ猶豫ヲ增ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ其呼出狀ノ効ナク且被告人ヲ抗傳者ナリトシテ裁判言渡ヲ為シタルト雖モ其言渡ノ効ナカル可シ○然レトモ被告人其呼出狀又ハ言渡ヲ取消サントスルニハ出席ノ上他事ヲ辨論シ又ハ訴ヲ拒ム憑據ヲ述フル前ニ先ツ其取消ヲ得ント求ム可シ

然レトモ極メテ急迫ノ場合ニ於テハ出席ノ期限ヲ更ニ短フシ治安裁判役ヨリ渡シタル別段ノ呼出狀ニ其日ノ中何時ニ出席ス可キヤヲ記スルヿヲ得可シ

第百四十七條　又原告及ヒ被告ハ別段呼出狀ノ送達ヲ受クルヿナク唯出席ヲ為ス可キノ報告書治安裁判役ヨリ渡スヲ得タルノミニテ隨意ニ出席スルヿヲ得可シ

第百四十八條　治安裁判役ハ檢察官ノ求メニ因リ又ハ民事原告人ノ求メニ因リ吟味ノ日ニ至ラサル前ニ註誤ノ罪ノ為メ受ケタル損害ノ高ヲ自カラ見積リテ其調書ヲ記シ又ハ監定人ヲシテ之ヲ見積ラシメタル上其調書ヲ記サシメ又ハ其他急速ニ為ス可キ處置ヲ自カラ為シ又ハ他人ヲシテ為サシムルヿヲ言渡スヲ得可シ

第百四十九條　若シ被告人呼出狀ニ記シタル日時ニ出席セサル時ハ抗傳者ナリトシテ言渡ヲ受ク可シ

第百五十條　抗傳シテ言渡ヲ受ケタル者後條ニ記スル吟味ノ日ニ出席セサル時ハ其言渡ノ執行ニ付キ故障ヲ述ヘタル効ナカル可シ但シ控訴並ニ覆審院ヘノ上告ニ付キ後ニ記スル所ハ格別ナリトス

第百五十一條　被告人抗傳シテ受ケタル言渡ニ付キ故障ヲ述ヘントスル時ハ其言渡書ノ巻詞トシテ其書ノ末ニ其旨ヲ附記シ又ハ其言渡書ノ送達ヲ得タルヨリ三日内ニ其故障

ノ申立書ヲ送ル可シ但シ三「ミリアメートル」毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ可シ

其故障ヲ申立タル時ハ其申立人定期ニ記スル期限ノ終リシ後最初ノ呼味ノ日ニ出席ス可ク若シ其日ニ出席セサル時ハ其故障申立ノ効ナカル可シ

第百四十六條 第百五十二條 呼出ヲ受ケタル者ハ自身出席シ又ハ名代人ヲ差出ス可シ

第百五十三條 呼味ハ公ケニ之ヲ為ス可ク若シ然ラサル時ハ其呼味ノ効ナカル可シ

其呼味ノ手續ヲ為ス順序ハ左ノ如シ

調書アル時ハ書記官之ヲ讀上クル事

撿察官又ハ民事ノ原告人證人ヲ呼出シタル時ハ其證人ノ申述ヲ聽ク事次ニ民事ノ原告人其求ムル所ヲ定ムル事

被告人答辯ヲ為ス事并ニ後條ニ記スル所ニ循ヒ證人ノ申述ヲ以テ證ト為シ得可キ場合ニ於テ其證人ヲ呼出シタル時ハ其證人ノ申述ヲ聽ク事

撿察官其罪犯ノ事件ヲ約縮シテ且其求ム

ル所ヲ定ムル書面ヲ差出ス事次ニ呼出ヲ受ケタル者此事ニ付キ自己ノ意ヲ述フル事

註誤裁判所ニテ吟味ノ手續終リタル日ニ直チニ裁判ヲ言渡ス事又ハ遲クトモ次ノ吟味ノ日其裁判ヲ言渡ス事

第百五十四條　註誤ノ罪犯ハ調書又ハ申立書司法警察官吏ヲ以テ之ヲ證シ又其調書及ヒ記シタル書ヲ以テ之ヲ證シ又其書ノアラサル時ハ證人ヲ以テ之ヲ證シ又其書アル時ト雖モ其書ニ記スル所ヲ更ニ

確的トラシムル為メ證人ヲ以テ之ヲ證ス可シ

何人ニ限ラス法律上ニテ罪犯ノ證ヲ立ル權ヲ任セラレシ警察官吏ノ記シタル調書又ハ申立書（價造ノ訴アル迄ハ確的トス可キ書トリ）ニ反シタル事件又ハ此等ノ書面ニ記シタル意外ノ事件ハ證人ヲ以テ證セシムルヿヲ得ス若シ證人ヲ以テ其證ヲ立テシメタルト雖モ其効ナカル可シ○又價造ノ訴アル迄ハ其書面ヲ確的ノモノト為ス可キ權ヲ法律上ニテ任セラレサル

官吏ノ記セシ調書又ハ申立書ニ付テハ裁判所ノ允許ヲ得タル上ニテ證書又ハ證人ヲ以テ之ニ反シタル證ヲ立ルヿヲ得可シ

第百五十五條　證人ハ吟味ノ席ニテ必ス正實ヲ述ヘ正實ノ外述ヘサル可キノ誓ヲ為ス可シ若シ其誓ヲ為サスシテ證ヲ述ヘタル時ハ其効ナカル可シ但シ書記官ハ證人ノ為シタル誓ノ旨ト其姓名、年齡、職業、住所ト其申述ル所ノ中重立タル箇條トヲ書取ル可シ

第百五十六條　被告人ノ尊屬及ヒ卑屬ノ親、其血屬及ヒ姻屬ノ兄弟姉妹並ニ既ニ離婚トナリタルト雖モ其配偶者ハ證人トシテ呼出ス可カラス又其述フル所ノ證ヲ聽取ル可カラス然レ𪜈檢察官民事ノ原告人被告人皆此條ニ記列スル者ノ述フル所ヲ聽クニ付キ故障ヲ述ヘサル時ハ此等ノ者ノ述ヘタル證ヲ聽取リタルト雖モ之ヲ取消ス可カラス

第百五十七條　證人呼出ヲ受ケテ出席ヲ為サル時ハ裁判所ヨリ檢察官ノ求メニ從ヒ吟味ノ席ニテ罰金ヲ言渡シ又再度ノ呼出ヲ受

ケ出席セサル時ハ裁判所ヨリ其證人ヲ召捕フ可キ旨ヲ言渡ス可シ

第百五十八條　初メ出席ヲ為サヽルニ付キ罰金ヲ言渡サレシ證人再度ノ呼出ニ從ヒ出席シタル上初メ出席セサルニ付キ正當ノ道理アルヿヲ辨解シタル時ハ檢察官ノ申立ニ從ヒ罰金ヲ免ルヽヿヲ得可シ

若シ初メ出席ヲ為サスシテ罰金ヲ言渡サレタル證人再度呼出ヲ受クサル時ハ次ノ吟味ノ日ニ自身出席シ又ハ名代人ヲ差出シテ初メノ出席セサリシ事由ヲ辨解シ正當ノ道理アル時ハ罰金ヲ免ルヽヿヲ得可シ

第百五十九條　若シ被告人ノ申立テラレタル所為重罪ニモ軽罪ニモ非サル時ハ裁判所ニテ其呼出狀並ニ其呼出後為シタル諸件ヲ取消シ且損失ノ償（被告人ノ求ムル所）ヲ言渡ス可シ

第百六十條　若シ被告人ノ申立テラレタル所為懲治刑（軽罪ノ罰スル刑）以上ニ處ス可キモノタル時ハ裁判所ヨリ原告被告ヲシテ檢察官ノ面前ニ出テシム可シ

第百六十一條　被告人ノ申立テラレタル所為
註誤タルノ證アル時ハ註誤裁判所ヨリ相當
ノ刑ト取戻及ヒ損害ノ償トヲ言渡ス可シ
第百六十二條　負訴訟ノ者ハ其相手方ノ裁判
費用ヲ償ヒ又刑事ノ原告人（即チ檢察官）ノ費用ヲ
償フ可シ
其費用ノ高ハ裁判所ニテ之ヲ定ム可シ
第百六十三條　犯人ヲ刑ニ處スル言渡書ニハ
其言渡ヲ為スニ付テノ道理ヲ記シ且其刑ニ
管シタル刑法ノ箇條ヲ記ス可シ若シ此等ノ

事ヲ記セサル時ハ其言渡書ノ効ナカル可シ」
又其言渡書ニハ終審ノ裁判タルヤ又ハ始審
ノ裁判タルヤヲ記ス可シ
第百六十四條　裁判言渡書ノ正本ニハ吟味ヲ
為シタル裁判役遅クトモ二十四時間ニ姓名
ヲ手署ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ書記官
二十五「フランク」ノ罰金ヲ言渡サレ又別段ノ
道理アル時ハ裁判役並ニ書記官損害ノ償ヲ
為ス可キノ訴ヲ受ク可シ（訴訟法第五百五條見合）
第百六十五條　檢察官ト民事ノ原告人トハ各

自己ニ管シタル事ニ付キ裁判言渡ノ如ク執行ノ手續ヲ為ス可シ

○第二款　邑長註誤罪ノ裁判ヲ為ス事

第百六十六條　縣ノ首邑ニ非サル邑ノ長ハ其邑内ニテ現ニ行フタル註誤ノ罪ヲ治安裁判役ト同シク裁判シ又證人其邑内ニ住居シ且民事原告人ノ償ヲ得ントスル高十五「フラン」ニ過キサル時ハ其邑内ニ住居スル者ノ犯シタル註誤ノ罪ヲ治安裁判役ト同シク裁判ス可シ

邑長ハ第百三十九條ニ循ヒ治安裁判役ノミ裁判ス可キ註誤ヲ裁判ス可カラス又治安裁判役ノ民事ニ付キ裁判ス可キ事件ヲ裁判ス可カラス

第百六十七條　邑長註誤ノ裁判ヲ為ス時ハ其輔佐檢察官ノ職ヲ行フ可シ若シ其輔佐アラサル時又ハ其輔佐邑長ニ代テ註誤裁判役ノ職ヲ行フ時ハ邑會議員中ニテ檢事ノ一年間選舉シタル者檢察官ノ職ヲ行フ可シ

第百六十八條　註誤裁判ノ事ニ付キ邑長ノ書記官ノ職務ハ邑長ノ撰ミタル者（平民ナリ）之ヲ行フ可シ但シ其者ハ輕罪裁判所ニ於テ擔ヲ為ス可シ○其者ハ書類ヲ記スルニ付キ治安裁判役ノ書記官ニ等シキ謝金ヲ受ク可シ

第百六十九條　呼出狀ヲ送達スルニハ必ス使吏ニ托スルニ及ハス又其呼出ハ邑長ヨリ送リタル報告書ヲ以テ為スヿヲ得可シ但レ其報告書ニハ被告人ノ申立テラレタル所為ト其出席ス可キ日時トヲ記ス可シ

第百七十條　又證人ヲ呼出スニ付テモ前條ニ等シク其證ヲ聽ク可キ日時ヲ記シタル報告書ヲ以テ之ヲ呼出スヿヲ得可シ

第百七十一條　邑長ハ邑ノ役所ニ於テ裁判ノ席ヲ開キ原告被告並ニ證人ヲ公ケニ吟味ス可シ

其他治安裁判役ノ吟味ノ手續及ヒ裁判言渡ニ付キ第百四十九條第百五十條第百五十一條第百五十三條第百五十四條第百五十五條第百五十六條第百五十七條第百五十八條第

百五十九條第百六十條ニ記スル所ノ規則ヲ邑長ノ為ス可キ吟味ノ手續及ヒ裁判言渡ニモ亦通シテ用ノ可シ

○第三款　註誤ノ裁判言渡ヲ控訴スル事

第百七十二條　註誤裁判所ニテ禁錮ヲ言渡シタル時又ハ裁判所費用ヲ除クノ外五「フラン」以上ノ罰金及ヒ償還ヲ言渡シタル時ハ其言渡ヲ控訴スルヿヲ得可シ

第百七十三條　註誤ノ裁判言渡ヲ控訴シタル時ハ其言渡ノ執行ヲ暫ク止ム可シ

第百七十四條　註誤裁判所ノ言渡ハ軽罪裁判所ニ控訴ス可シ此控訴ハ負訴訟ノ者又ハ其住所ニ言渡書ヲ送達シタルヨリ十日内ニ之ヲ為ス可シ但シ其控訴ヲ為シタルヨリ裁判ニ至ル迄ノ法式ハ治安裁判役ノ言渡ヲ控訴ナシタル時ト同一ナリトス（訴訟法第四百四條以下見合）

第百七十五條　控訴ヲ為シタル上ニテ檢事又ハ民事ノ原告人或ハ被告人ノ求メニ從ヒ再ヒ證人ノ述フル所ヲ聽キ又ハ更ニ他ノ證人

ノ述フル所ヲ聽クヿヲ得可シ

第百七十六條　吟味手續ノ法式、證據ノ種類、裁判言渡書ノ法式、其公正ナル事、其言渡書ニ姓名ヲ手署スル事、裁判費用ヲ出ス可キノ言渡ヲ為ス事並ニ刑罰ヲ言渡ス可キ事等ノ諸事ニ付キ前數條ニ記シタル規則ハ控訴ノ上輕罪裁判所ニテ為ス所ノ言渡ニモ亦通シテ之ヲ用フ可シ

第百七十七條　檢察官及ヒ民事ノ原告人並ニ被告人ハ註誤裁判所ニ為シタル終審ノ裁判言渡又ハ控訴ノ上輕罪裁判所ニテ為シタル裁判言渡ヲ取消サント覆審院ニ上告スルヿヲ得可シ

其上告ハ別段定メタル法式ト期限トニ循ヒ之ヲ為ス可シ

第百七十八條　三ケ月ノ期限（即チ註誤裁判所ヲ開キ置ク定期ノ初毎ニ治安裁判役及ヒ邑長ヨリ前三ケ月ノ期限間註誤ノ罪犯ニ付キ禁錮ヲ言渡シタル裁判言渡書ノ抜書ヲ檢事ニ送ル可シ○其抜書ハ書記官無税ニテ之ヲ渡ス可シ

檢事ハ其拔書ヲ輕罪裁判所ノ書記局ニ納ム可シ

檢事ハ其拔書ヲ更ニ簡略ニ為シテ之ヲ控訴院ノ檢事長ニ出ス可シ

○第二章　輕罪裁判所ノ事（即チ懲治刑裁判所）

第百七十九條　民事ニ付テノ初告裁判所（即チ一郡）ノ名義ヲ以テ官ニ屬（毎ニ設ケタルモノハ輕罪裁判所）スル森林ニ管シタル罪（輕罪並ニ註誤ヲ云フ）及ヒ五日以上ノ禁錮又ハ十五「フランク」以上ノ罰金ヲ言渡ス可キ總テノ輕罪ヲ裁判ス可シ

第百八十條　輕罪裁判所ニテハ裁判役三員以上ニテ裁判ヲ言渡ス可シ

第百八十一條　若シ輕罪裁判所ニテ吟味ヲ為ス時間其裁判所ノ郡内ニ於テ輕罪ヲ犯ス者アル時ハ其上席人其罪犯ヲ調書ニ記シテ其犯人及ヒ證人ノ申述ヲ聽キ直チニ法律上ニテ定マリタル刑ヲ言渡ス可シ

又控訴院及ヒ重罪裁判所ニテ吟味ヲ為ス時間又ハ民法裁判所ニテ吟味ヲ為ス時間其郡内ニテ輕罪ヲ犯ス者アル時ハ亦此條ニ記ス

ル所ノ規則ヲ通シ用フ可シ但シ此條ニ記ス
ル民法裁判所又ハ軽罪裁判所ノ言渡ハ之ヲ
控訴スルヿヲ得可シ

第百八十二條　軽罪裁判所ハ第百三十條及ヒ
第百六十條ニ記スル所ニ従ヒ軽罪ノ吟味ニ
取掛リ又ハ民事ノ原告人ヨリ被告人又ハ被
告人ノ為メ責ニ任ス可キ者ニ對シ為シタル
呼出ニ因リ其吟味ニ取掛リ又森林ニ管シタ
ル罪犯ニ付テハ森林ノ支配人森林ノ監察、監
察ノ補役及ヒ監守人ノ訴ニ因リ其吟味ニ取

掛リ又如何ナル場合ニ於テモ檢事ノ求メニ
因リ其吟味ニ取掛ル可シ

第百八十三條　民事ノ原告人ハ被告人ヘノ呼
出狀ニ裁判所所在ノ地ニ於テ別段住所ヲ擇
ミタル旨ヲ附記ス可シ又其呼出狀ニハ被告
人ノ犯シタリトスル罪ヲ記ス可シ但シ其呼
出狀ハ犯罪申立書ト同視ス可シ

第百八十四條　呼出狀ヲ送達シタルト裁判言
渡トノ間少クトモ三日ノ猶豫アル可ク被告
人遠地ニ住スル時ハ三「ミリアメートル」毎ニ

更ニ一日ノ猶豫ヲ加フ可シ若シ此規則ニ背キ被告人ヲ抗傳者ナリトシテ裁判ヲ言渡スヿアリトモ其言渡ノ効ナカル可シ

然レドモ被告人其言渡ヲ取消サントスルニハ次ニ出席シタル時其他事ヲ辨論シ又ハ訴ヲ拒ム憑據ヲ述ノル前ニ先ツ其取消ヲ得ント求ム可シ

第百八十五條　禁錮以下ノ刑ニ處ス可キ軽罪ノ時ハ被告人其名代トシテ代書師ヲ差出スヿヲ得可シ然レドモ裁判所ニテ其時ノ模様ニ

從ヒ本人自カラ出席ス可キヿヲ言渡スヿヲ得可シ

第百八十六條　若シ被告人出席セサル時ハ抗傳ノ儘裁判言渡ヲ受ク可シ

第百八十七條　千八百六十六年六月廿七日左ノ如ク改ム被告人ニ抗傳ノ儘裁判ヲ言渡シタル時其言渡書ヲ被告人又ハ其住所ニ送達シタルヨリ五日内ニ其被告人其裁判言渡ヲ執行フニ付キ故障ヲ述ヘ且檢察官ト民事ノ原告人トニ其故障申述書ヲ送リタルニ於テ

ハ其裁判言渡ノ効ナカル可シ但シ被告人遠地ニ住スル時ハ五「ミリアメートル」毎ニ五日ノ期限ニ一日ノ猶豫ヲ加フ可シ

其裁判言渡書ヲ寫テ之ヲ送達スル費用及ヒ故障申述書ヲ送達スル費用ハ抗傳シタル被告人ノ引受ケタル可シ

然レトモ其裁判言渡書ヲ現ニ其被告人ニ届ケスヌハ其裁判言渡ヲ執行フタル證書ニ因リ被告人其執行ヲ知ラサル可シト思料ス可キ時ハ其被告人刑ノ期滿免除ノ期限ニ至ル迄

其故障ヲ申述フルヿヲ得可シ

第百八十八條　抗傳シタル被告人裁判言渡ニ付ト故障ヲ申述ヘタル時ハ次ノ吟味ノ日ニ出席ス可キ呼出ヲ受ケタルト同視ス可クシテ次ノ吟味ノ日ニ出席セサル時ハ其故障申述ノ効ナカル可シ然ル上ハ其故障ヲ申述ヘタル者控訴ヲ為スニ非サレハ其裁判言渡ヲ取消サントス求ム可カラス

此場合ニ於テ別段ノ道理アル時ハ裁判所ヨリ假リニ其裁判言渡ノ如ク執行フ可キノ言

渡ヲ為スヿヲ得可シ但シ此場合ニ於テハ相手方控訴ヲ為スニ管セス其裁判言渡ノ如ク執行ヲ可シ

第百八十九條（千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム）軽罪犯ノ證ヲ得ル方法ハ註誤ノ證ニ付キ第百五十四條第百五十五條第百五十六條ニ記シタル所ト同一ナリトス○書記官ハ證人ノ申述並ニ被告人ノ答辯ヲ覺書ニ記スヿ可シ○其覺書ハ裁判言渡ヨリ三日内ニ上席人之ニ檢印スヿ可シ○第百五十七條第百五十八條第百五十九條第百六十條第百六十一條ノ規則ハ軽罪ノ場合ニモ亦通シ用ヲ可シ

第百九十條　吟味ハ公ケニ為スヿ可レ若シ公ケニ為サヽル時ハ其効ナカル可シ

檢事、民事ノ原告人又ハ其代言人又森林ニ管シタル罪犯ニ付テハ森林ノ丈配人、森林ノ監察又ハ其補役若シ其アラサル時ハ森林ノ監守人罪犯ノ摸様ヲ辨明シ調書又ハ申立書アル時ハ書記官之ヲ讀上ケ又双方證人ノ述フ

ル所ヲ聞糺シ一方ノ者證人ニ付キ故障ヲ述ヘント欲スル時ハ之ヲ述ヘシメテ其裁判ヲ為シ且有罪ノ證書類又ハ無罪ノ證書類ヲ證人ト双方トニ示シ被告人ヲ問糺シテ被告人及ヒ被告人ノ為メ責ニ任スヘキ者其答辯ヲ為シ檢事其罪犯ノ條件ヲ約縮シテ其求ムル所ヲ定メ被告人及ヒ被告人ノ為メ責ニ任スヘキ者之ニ答フルヿヲ得可シ

其後直チニ裁判ヲ言渡シ又ハ遲タトモ次ノ吟味ノ日ニ其裁判ヲ言渡ス可シ

第九十一條　若シ被告人ノ申立テラレタル所為輕罪ニモ註誤ニモ非サル時ハ裁判所ニテ吟味ノ手續及ヒ呼出狀並ニ其他ノ諸件ヲ取消シテ被告人ヲ赦宥シ其損失ノ償ヲ言渡ス可シ（被告人ノ得ル所）

第百九十二條　若シ被告人ノ申立テラレタル所為註誤ナル時刑事ノ原告人及ヒ民事ノ原告人ヨリ註誤裁判所ニ其吟味ヲ移スヿヲ求メサル時ハ輕罪裁判所ニテ相當ノ刑ヲ言渡シ且損害ノ償ヲモ言渡ス可シ

此場合ニ於テハ軽罪裁判所ノ裁判言渡ヲ終審ノモノトス可シ

第百九十三條　若シ被告人ノ申立テラレタル所為施體又ハ加辱ノ刑ニ處ス可キ罪（重罪ヲ云フ）ナル時ハ軽罪裁判所ヨリ直チニ禁錮狀又ハ收監狀ヲ出シ其被告人ヲシテ管轄ノ下吟味掛リ裁判役ノ面前ニ出テシム可シ

第百九十四條　被告人及ヒ被告人ノ為メ責ニ任ス可キ者負訴訟トナリ又ハ民事ノ原告人負訴訟トナル時ハ相手方ノ裁判費用ヲ償ヒ且刑事ノ原告人ノ裁判費用モ亦償フ可キノ言渡ヲ受ク可シ

其費用高ハ裁判言渡書ニ之ヲ定ム可シ

第百九十五條　裁判言渡書ニハ呼出サレタル者ノ犯シタル罪又ハ其者ノ為メ責ニ任ス可キ條件ヲ記シテ且其刑ノ言渡及ヒ民事上ノ言渡ヲ記ス可シ

其罪ニ付キ言渡セシ刑ニ管シタル刑法ノ箇條ハ上席人吟味ノ席ニテ之ヲ讀上ケ裁判言渡書ニ其讀上ヲ為シタル旨ヲ附記シテ且其

讀上ケタル刑法ノ箇條ヲ記入スヲ可シ若シ書記官此規則ニ背ク時ハ五十フランクノ罰金ヲ言渡サル可シ

第百九十六條　裁判言渡書ノ正本ニハ之ニ管シタル裁判役遲クトモ二十四時間ニ其姓名ヲ手署ス可シ

若シ裁判役姓名ヲ手署セサル前ニ書記官其言渡書ノ寫ヲ渡ス時ハ贋造者タルノ訴ヲ受ク可シ

檢事ハ毎月裁判言渡書ノ正本ヲ受取テ之ヲ檢視シ若シ此條ノ規則ニ背ク事アル時ハ相當ノ處置ヲ為スニ付キテノ調書ノ記ス可シ

第百九十七條　檢事及ヒ民事ノ原告人ハ各自己ニ管スル事ニ付キ裁判言渡ノ如ク執行フフ求ム可シ

然レトモ罰金ヲ取立テ及ヒ罪犯ニ管シタル物件ヲ官ニ没收スルノ手續ハ記錄稅役所ノ支配人檢事ノ名目ヲ以テ之ヲ為ス可シ

第百九十八條　檢事ハ裁判言渡ヨリ十五日内ニ其拔書ヲ控訴院ノ檢事長ニ送ル可シ

第百九十九條　輕罪ニ管シタル裁判言渡ハ控訴ヲ為シテ之ヲ取消サントスルヿヲ得可シ

第二百條　〔千八百五十六年六月十三日廢ス〕

第二百一條　〔千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム〕輕罪ニ管スル裁判言渡ハ控訴院ニ控訴ス可シ

第二百二條　〔千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム〕左ノ各人ハ控訴ヲ為スヿヲ得可シ

第一　被告人又ハ被告人ノ為メニ責ニ任ス可キ者

第二　民事ノ原告人但シ民事ノ管係ノミニ限ル可シ

第三　官ノ森林ニ管シタル官吏

第四　檢事

第五　控訴院ノ檢事長

第二百三條　裁判言渡ノ日ヨリ遲クトモ十日内ニ其言渡ヲ為シタル裁判所ノ書記局ニ控訴ヲ為ス旨ヲ届ケ又抗傳シテ言渡ヲ受ケタル時ハ其言渡ヲ受ケタル者又ハ其住所ニ其

言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ遅クトモ十日内ニ同上ノ旨ヲ届クルニ非サレハ第二百五條ニ記スル所ヲ除クノ外控訴ヲ為スノ權ヲ失フ可シ但シ抗傳者ノ住所遠キ時ハ三「ミリ」アメートル毎ニ其十日ノ期限ニ一日ノ猶豫ヲ加フ可シ

此期限ノ間ト控訴ノ上吟味ヲ受クル間トニ於テハ軽罪裁判所ノ言渡ヲ取行フヿヲ暫ク止ム可シ

第二百四條（千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム）控訴ヲ為スニ付テノ憑據ヲ記シタル願書ハ前條ニ記スル期限内ニ同上ノ書記局ニ納ム可シ但シ其願書ハ控訴人又ハ代書師又ハ其他ノ名代人之ニ姓名ヲ手署ス可シ」名代人其願書ニ姓名ヲ手署シタル時ハ本人ヨリ名代ノ權ヲ授ケタル證書ヲ其願書ニ添ヘ差出ス可シ

又其願書ハ直チニ控訴院ノ書記局ニ差出スヿヲ得可シ

第二百五條（千八百五十六年六月十三日左ノ

如ク改ム〕控訴院ノ檢事長ハ輕罪裁判所ノ言渡ノ日ヨリ二月内ニ被告人及ヒ被告人ノ為メ責ニ任ス可キ者ニ控訴書ヲ送リ又檢事長此等ノ者ヨリ法式ニ循ヒ輕罪裁判所ノ言渡書ノ送達ヲ得タル時ハ其送達ヲ得タル時ヨリ一月内ニ此等ノ者ニ控訴書ヲ送ル可シ然ラサレハ檢事長其控訴ノ權ヲ失フ可シ

第二百六條〔千八百六十五年七月十四日左ノ如ク改ム〕被告人無罪タルノ言渡ヲ得タル時ハ控訴ニ管セス直チニ之ヲ赦宥ス可シ

第二百七條〔千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム〕控訴ノ憑據ヲ記シタル願書ヲ輕罪裁判所ノ書記局ニ差出シタル時ハ檢事其願書ト總テノ書類トヲ控訴ノ届又ハ控訴書ノ送達ヨリ二十四時間ニ控訴院ノ書記局ニ送ル可シ

輕罪裁判所ニテ刑ヲ言渡サレシ被告人既ニ留置場ニ入リタル時ハ檢事ノ言附ニテ同上ノ期限間ニ之ヲ控訴院附ノ留置場ニ移ス可シ

第二百八條（千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム）控訴ヲ為シタル上一方ノ者抗傳シテ受ケタル裁判言渡ハ軽罪裁判所ニテ一方抗傳シテ受ケタル言渡ニ付キ故障ヲ述フルト同一ノ法式及ヒ期限ニ從ヒ其故障ヲ述フルヿヲ得可シ

其故障ヲ述ヘタル時ハ次ノ吟味ノ日ニ出席ス可キ呼出ヲ受ケタリト同視シ若シ其故障ヲ述ヘタル者次ノ吟味ノ日ニ出席セサル時ハ其故障申述ノ効ナカル可シ○故障ノ申述ニ付キ受ケタル裁判言渡ハ其故障ヲ述ヘタル者覆審院ニ上告スルノ外其取消ヲ訴フ可カラス

第二百九條（千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム）控訴ハ之ヲ為シタルヨリ一月内ニ控訴院ノ裁判役一員ノ申立ノ上公ケノ吟味ノ席ニテ之ヲ裁判ス可シ

第二百十條（千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム）掛リ裁判役（即チ前條ニ記スルモノヲ云フ）ノ申立ヲ為シタル上其裁判役並ニ他ノ裁判役未タ

其說ヲ述ヘサル内嘗テ軽罪裁判所ニテ無罪ノ言渡ヲ得タルト刑ノ言渡ヲ受ケタルトヲ問ハス被告人、被告人ノ為メ責ニ任ス可キ者、民事ノ原告人、檢事長第百九十條ニ記シタル法式ト順序トニ循ヒ其申述ヲ為ス可シ

第二百十一條 〔千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム〕軽罪裁判所ノ吟味手續ノ法式、證據ノ種類、裁判言渡書ノ法式、其言渡書ノ公正ナル事、其言渡書ニ姓名ヲ手署スル事、裁判費用ヲ出ス可キノ言渡ヲ為ス事並ニ刑罰ヲ言渡ス可キ事等ノ諸事ニ付キ前數條ニ記シタル規則ハ控訴ニ付キ為シタル裁判言渡ニモ亦通シテ用ヲ可シ

第二百十二條 〔千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム〕被告人ノ申立ラレタル所為法律上ニテ軽罪トモ註誤トモ為サヽルニ因リ控訴ノ上軽罪裁判所ノ言渡ヲ更改スル時ハ控訴院ニテ被告人ヲ赦宥シ別段ノ道理アル時ハ損失ノ償ヲ言渡ス可シ

第二百十三條 〔千八百五十六年六月十三日左

ノ如ク改ム〕被告人ノ申立テラレタル所為註誤タルニ付キ軽罪裁判所ノ言渡ヲ取消ス時刑事ノ原告人及ヒ民事ノ原告人註誤裁判所ニ其吟味ヲ移ス可キヿヲ求メサルニ於テハ控訴院ニテ相當ノ刑ヲ言渡シ且別段ノ道理アル時ハ損害ノ償ヲ言渡ス可シ

第二百十四條〔千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム〕被告人ノ申立テラレタル所為施體又ハ加辱ノ刑ニ處ス可キ罪タルニ因リ軽罪裁判所ノ言渡ヲ取消ス時ハ控訴院ニテ禁錮狀又ハ收監狀ヲ出シ其被告人ノ相當ノ官吏〔下吟味掛リ裁判役又ハ撿事ヲ云フ〕ノ面前ニ至ラシム可シ但シ以前其被告人ノ罪犯ニ付キ言渡ヲ為シ又ハ吟味ヲ為シタル官吏ノ面前ニ至ラシム可カラス

第二百十五條〔千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム〕軽罪裁判所ノ言渡法律上ニテ必要ナリト定メタル法式ニ背キ又ハ其法式ヲ缺キタルニ因リ控訴ノ上之ヲ取消ス時ハ控訴院ニテ其本案ニ付キ裁判ヲ言渡ス可シ

第二百十六條（千八百五十六年六月十三日左ノ如ク改ム）民事ノ原告人、被告人、刑事ノ原告人、被告人ノ為メ責ニ任ス可キ者ハ控訴院ノ言渡ヲ取消サント覆審院ニ上告スルヿヲ得可シ

○第二巻　倍審ニ任カス可キ事件（即チ重罪ヲ云フ）（千八百八年十二月九日決定同月十九日布告）

○第一章　重罪アリト告クル事（控訴院ノ重罪取調局ニテ下調ヲ為シタル上ニテ被告人ニ重罪アリト告ケ然ル上ニテ重罪裁判所ニ其吟味ヲ移スナリ）

第二百十七條　控訴院ノ檢事長ハ第百三十三條又ハ第百三十五條ニ循ヒ已ニ送達ヲ得可キ書類ヲ受取リタルヨリ五日内ニ其事件ヲ取調ヘ其後遲クトモ五日内ニ其申立ヲ為ス可シ

其期限間（即チ十日間ヲ云フ）民事ノ原告人及ヒ被告人其相當ト思料スル所ノ覺書ヲ差出スヿヲ得

可シ但シ之カ為メ檢事長ノ申立ヲ遲延スルヿナカル可シ

第二百十八條（千八百五十六年七月十七日左ノ如ク改ム）控訴院中ニ別段一局（即チ重罪取調局）ヲ設ケ置キ其上席人ノ言附ト檢事長ノ求トニ從ヒ其申立ヲ聽キ之ヲ裁判ス可キ為ノ其局中ノ裁判役會議ヲ為ス可シ

檢事長ヨリ別段求メヲ受ケサル時ト雖モ少クトモ毎週一度其會議ヲ為ス可シ

第二百十九條（千八百五十六年七月十七日左ノ如ク改ム）上席人ハ檢事長ノ申立ヲ為シタル後直チニ重罪取調局ヲシテ其裁判ヲ為サシムルノ手續ヲ為ス可シ若シ直チニ其裁判ヲ為スヿヲ得サル時ハ遲クトモ三日内ニ其裁判ヲ為ス可シ

第二百二十條　若シ其事件大審院又ハ覆審院ノ管轄タル可キ時ハ檢事長重罪取調局ニ其事件ノ取調ヲ止メテ之ヲ大審院又ハ覆審院ニ移ス可キ旨ヲ求メ重罪取調局ニテ其旨ヲ言渡ス可シ

第二百二十一條　前條ニ記シタル場合ノ外重罪取調局ニテ被告人ノ所為法律上ニテ重罪ト為スヘキモノタルノ證又ハ徵憑アルヤ否ヲ取調ヘ且其證又ハ徵憑ニ因リ被告人ノ重罪ヲ犯シタリト告ク可キノ言渡ヲ為スヘキヤ否ヲ取調フヘシ

第二百二十二條　書記官ハ檢事長ノ面前ニテ訴ニ管シタル總テノ書類ヲ裁判役ニ讀ミ聞カセ其後其書類ト民事ノ原告人並ニ被告人ヨリ差出シタル覺書トヲ皆重罪取調局ニ納メ置クヘシ

第二百二十三條　民事ノ原告人、被告人、證人ハ出席スルヿナカルヘシ

第二百二十四條　檢事長ハ其姓名ヲ手署セシ求刑ノ書ヲ重罪取調局ニ納メタル後書記官ト共ニ其席ヲ退クヘシ

第二百二十五條　重罪取調局ノ裁判役ハ即時ニ商議スヘク其間他人ト語ヲ叅ユヘカラス

第二百二十六條　重罪取調局ニテ取調フル所ノ重罪ニ附帶シタル罪犯ノ證書類其局ニア

ル時ハ其重罪ト共ニ附帶ノ罪犯ヲモ亦取調テ共ニ裁判ス可シ（真ニ重罪ノ裁判ヲ為スハ重罪裁判所ノ職務ニシテ重罪取調局ニテハ唯被告人重罪ヲ犯シタルト告ク可キヤ否ヤヲ裁判スルノミナリ）

第二百二十七條　數人組合ヲテ同時ニ罪ヲ犯シタル時又ハ日時ト場所トニ共ニ異ナルト雖モ數人申合セ罪ヲ犯シタル時又ハ犯人甲ノ罪ヲ犯サントスル便ヲ得ル為メ乙ノ罪ヲ犯シタル時又ハ甲ノ罪ヲ犯スヲ容易ナラシム為メ或ハ甲ノ罪ヲ為シ遂クル為メ或ハ甲ノ罪ヲ犯シ其罰ヲ免ル、為メ乙ノ罪ヲ犯シタル時ハ附帶ノ罪犯ナリトス

第二百二十八條　重罪取調局ニ於テハ別段ノ道理アル時更ニ下吟味ヲ為ス可キヿヲ言渡スヲ得可シ

又其局ニテ別段ノ道理アル時ハ軽罪裁判所ノ書記局ニ納メタル罪犯ノ證書類ヲ差越ス可キヿヲ言渡スヲ得可シ

此事ノ諸事ハ成ル可キ丈速ニ言渡ス可シ

第二百二十九條（十八百五十六年七月十七日左ノ如ク改ム）若シ重罪取調局ニテ罪犯ノ痕

迹ナシト思ノ時又ハ其痕迹アリト雖モ被告人其罪ヲ犯シタルノ十分ナル憑據ナシト思フ時ハ其被告人ヲ赦宥ス可キ旨ヲ言渡ス可シ但シ被告人他ノ事故アリテ禁錮ヲ受ケタル時ノ外ハ即時ニ其言渡ノ如ク執行フ可シ」

下吟味掛リ裁判役被告人ヲ赦宥ス可キ旨ヲ言渡シ其言渡ニ付キ故障ヲ述フル者アリテ重罪取調局ニテ之ヲ取調ヘタル上罪犯ノ證ナシト思料スル時ハ重罪取調ヘ局ニテ下吟味掛リ裁判役ノ言渡ヲ確的トナス旨ヲ言渡シ前項ニ記スル如ク即時ニ其言渡ノ如ク執行フ可シ

第二百三十條（千八百五十六年七月十七日左ノ如ク改ム）重罪取調局ニテ被告人ヲ註誤裁判所又ハ輕罪裁判所ニ移ス可シト思料スル時ハ之ヲ相當ノ裁判所ニ移スヿヲ言渡ス可シ但シ被告人ヲ註誤裁判所ニ移ス時ハ之ヲ赦宥ス可シ禁錮ヲ免スヿヲ云フ

第二百三十一條（千八百五十六年七月十七日左ノ如ク改ム）若シ被告人ノ罪法律上ニテ重

罪ヲ犯シタリト告クルニ付キ十分ナル憑據アリト思料スル時ハ重罪取調局ヨリ被告人ヲ重罪裁判所ニ移スヿヲ言渡ス可シ（即チ重罪ヲ犯シタリト告ル旨ヲ云渡スヲ云フ）

如何ナル場合ニ於テモ重罪取調局ニテハ下吟味掛リ裁判役ノ言渡如何ナルヲ問ハス檢事長ノ求メニ從ヒ其局ニ訴ヘヲ移シタル各被告人ニ付キ其取調ニ因リ知リ得可キ重罪、輕罪、註誤ノ箇條ヲ裁斷ス可シ（罪ヲ犯シタリト告ル云渡ヲ為ス可キヤ否ヤヲ裁判スルヲ云フ）

第二百三十二條（千八百五十六年七月十七日左ノ如ク改ム）重罪取調局ニテ被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可キ旨ヲ言渡シタル時ハ被告人ニ對シ名捕ノ言渡書ヲ出ス可シ（第百二十六條見合）

其言渡書ニハ被告人ノ姓名、年齡、職業、住所、出産ノ地ヲ記シ且其罪犯ノ模樣ト其罪ニ管シタル刑法ノ箇條トヲ記ス可シ若シ之ヲ記セサル時ハ其言渡書ノ効ナカル可シ

第二百三十三條（千八百五十六年七月十七日

左ノ如ク改ム被告人名捕ノ言渡書ハ重罪ヲ犯シタリト告ク可キ旨ノ言渡書中ニ記入ス可シ但シ其言渡書ニハ重罪裁判所附ノ留置場ニ被告人ヲ送ル可キノ命令ヲ附記ス可シ

第二百三十四條　重罪取調局ノ言渡書ニハ其局ノ各裁判役之ニ姓名ヲ手署ス可シ且其言渡書ニハ檢察官ノ求刑ト各裁判役ノ姓名トヲ附記ス可シ若シ之ヲ附記セサル時ハ其言渡書ノ効ナカル可シ

第二百三十五條　如何ナル事件ニ付テモ重罪取調局ニテ被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可キヤ否ヲ決定セサル間ハ既ニ他ノ裁判役下吟味ヲ為シ始メタルト否トヲ問ハス其局ノ公務ヲ以テ檢察官ニ更ニ其罪ヲ訴ヘシム可キ旨ヲ言渡シ證書類ヲ出サシメ且其下吟味ヲ為シタル上ニテ相當ノ言渡ヲ為スヿヲ得可シ

第二百三十六條　前條ノ場合ニ於テハ第二百十八條ニ記シタル局（即チ重罪取調局）ノ裁判役一員下吟味掛リ裁判役ノ職ヲ行フ可シ

第二百三十七條　其下吟味掛リ裁判役ハ自カラ證人ノ申述ヲ聽キ又ハ證人住所ノ初告裁判所ノ裁判役一員ヲシテ其申述ヲ聽カシメ且被告人ヲ問糺シテ罪犯ニ付キ總テノ證又ハ憑據ヲ書面ヲ以テ證セシメ其時ノ摸樣ニ因リ引出狀又ハ禁錮狀又ハ收監狀ヲ出ス可シ

第二百三十八條　檢事長ハ下吟味掛リ裁判役ヨリ證書類ヲ受取リタル時ヨリ五日内ニ申立ヲ為ス可シ

第二百三十九條　〔千八百五十六年七月十七日左ノ如ク改ム〕吟味ノ上ニテ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス可キ時ハ重罪取調局ニテ第二百三十一條第二百三十二條第二百三十三條ニ記スル如ク言渡ス可シ

又吟味ノ上被告人ヲ輕罪裁判所ニ移ス可キ時ハ重罪取調局ニテ第二百三十條ノ規則ニ循フ可シ

此場合ニ於テ既ニ被告人ヲ留置場ニ入レタル時其罪禁錮以上ノ刑ニ處ス可キニ於テハ

裁判言渡ニ至ル迄被告人ヲ其儘留置場ニ入レ置ク可シ

第二百四十條　其他此治罪法中ニテ前五條ニ反セサル規則ハ重罪取調局ニテ下吟味ヲ言渡シタル場合ニ通シ用フ可シ

第二百四十一條　總テ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス可キ時ハ檢事長重罪告訴狀ヲ記ス可シ

重罪告訴狀ニハ左件ヲ記ス可シ

第一　罪ノ書類

第二　罪ヲ重クシ又ハ輕クス可キ所以及ヒ總テノ摸樣

又此書ニハ被告人ノ姓名年齡、住所職業、出産ノ地等ヲ詳カニ記ス可シ

告訴狀ノ末ニ其罪犯ヲ告訴スル旨ヲ簡略ニ記ス可シ但シ其文ハ左ノ如クナル可シ

右ニ因リ某何々ノ殺害盜奪又ハ何々ノ重罪ヲ犯シタル事ヲ告訴ス但シ其罪犯ノ摸樣ハ云々タリ

第二百四十二條　被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス言渡書及ヒ重罪告訴狀ハ其被告人ニ送達シ

此等ノ書面ノ寫ヲ被告人ニ渡シ置ク可シ

第二百四十三條　前條ニ記シタル書面ヲ送達シタルヨリ二十四時内ニ被告人ヲ軽罪裁判所附ノ留置場ヨリ其裁判ヲ受ク可キ裁判所重罪裁判所附ノ留置場ニ移ス可シ

第二百四十四條　若シ被告人ヲ召捕ユルヿ能ハス又ハ被告人出席セサル時ハ此篇第四卷第二章ニ記スル如ク抗傳者重罪被告人ノ抗傳トシテ處置ス可シ

第二百四十五條　檢事長ハ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス言渡書ヲ被告人住所ノ地ノ知レタル時ハ其地ノ邑長ト犯罪ノ地ノ邑長トニ送ル可シ

第二百四十六條　被告人ヲ重罪取調局ヨリ重罪裁判所ニ至ルニ及ハサルノ言渡ヲ得タル時ハ同一ノ事件ニ付キ重罪裁判所ニ引出サルヿナカル可シ但シ其罪犯ニ付キ更ニ新ナル憑據アル時ハ格別ナリトス

第二百四十七條　是レ迄重罪取調局ニ差出スヿヲ得スシテ新タニ差出シ且罪犯ノ證ヲ確

的ニ為シ又ハ事實ヲ見出スニ有益ナル證人ノ申述書、證書、調書ハ罪犯ニ付テノ更ニ新ナル憑據ナリト看做スヲ可シ

第二百四十八條　此場合ニ於テハ司法警察ノ官吏又ハ下吟味掛リ裁判役新タニ得タル證書類ノ寫ヲ遅延ナク控訴院ノ檢事長ニ送リ重罪取調局ノ上席人檢事長ノ求メニ因リ檢察官ノ申立ニヲ法式ニ從ヒ更ニ下吟味ヲ為スヲ可キ裁判役ヲ示スヲ可シ

下吟味掛リ裁判役ハ新タニ罪犯ノ憑據タル

證書類ヲ得タル上之ヲ檢事長ニ送ラサル前ニ第二百二十九條ニ循ヒ既ニ赦宥シタル被告人ニ對シ禁錮狀ヲ出スヲヲ得可シ

第二百四十九條　檢事ハ總テノ重罪犯、輕罪犯、註誤罪犯ノ事件ヲ八日毎ニ檢事長ニ報告スヲ可シ

第二百五十條　若シ檢事長輕罪犯又ハ註誤罪犯ノ報告ヲ得タルト上ニテ其事件更ニ重劇ナル模樣アリト思フ時ハ其報告ヲ受ケタルヨリ十五日内ニ其事件ニ付テノ書類ヲ已レニ

受取リ之ヲ受取リタルヨリ更ニ十五日内ニ其相當ト思料スル所ヲ重罪取調局ニ申立テ其局ニテ其申立ニ付キ三日内ニ相當ノ言渡ヲ為ス可シ

○第二章　重罪裁判所ヲ設クル方法

第二百五十一條　控訴院ノ重罪取調局ヨリ重罪ヲ犯シタリト告クル被告人ヲ裁判スル為メ各州毎ニ重罪裁判所ヲ設ク可シ

第二百五十二條　控訴院所在ノ州ニ於テハ其裁判所ノ裁判役三員出張シテ重罪裁判所ノ裁判役トナル可シ但シ其中ノ一員上席人タル可シ

重罪裁判所ノ檢察官ノ職務ハ檢事長又ハ代言人長若クハ檢事長ノ代役之ヲ為ス可シ

重罪裁判所ノ書記官ノ職務ハ控訴院ノ書記官自カラ之ヲ行ヒ又ハ其補役ヲシテ之ヲ行ハシム可シ

第二百五十二條　〔千八百五十五年三月二十一日左ノ如ク改ム〕控訴院ノアラサル州ニ於テハ左ノ官員重罪裁判所ノ官員タル可シ

第一　別段任セラレタル控訴院ノ裁判役一員」但シ此裁判役ハ重罪裁判所ノ上席人タル可シ

第二　控訴院ニテ其裁判所ノ裁判役ヲ出張セシムルヿヲ適當ナリト思フ時ハ其裁判役二員若シ然ラサル時ハ重罪裁判所ヲ設ク可キ地ノ初告裁判所ノ上席人又ハ裁判役二員

第三　初告裁判所ノ檢事又ハ其代役一員」但シ第二百六十五條第二百七十一條第二百八十四條ノ規則ノ差支トナルヿナカル可シ

第四　初告裁判所ノ書記官又ハ其補役一員

控訴院ノ上席人ハ先ツ檢事長ニ相談シタル上重罪裁判所ノ裁判役トナル可キ初告裁判所ノ上席人又ハ裁判役ヲ撰ム可シ○其撰擧ハ千八百十年七月六日ノ命令書ノ第七十九條及ヒ第八十條ニ記シタル法式ト期限トニ從ヒ之ヲ為シ且之ヲ公ケニス可シ

重罪裁判所ノ會議ヲ開キタル後ハ其裁判所ノ上席人正當ノ差支アリテ出席セサル裁判役ノ代人ヲ撰ミ又別段ノ道理アル時ハ裁判役ノ補役ヲ撰ム可シ

第二百五十四條（千八百三十年十二月十日廢ス）

第二百五十五條（同）

第二百五十六條（同）

第二百五十七條　重罪取調局ニ在テ被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可キ言渡ニ管シタル控訴院ノ裁判役ハ其事件ニ付キ重罪裁判所ノ上席人又ハ裁判役タル可カラス若シ其裁判役重罪裁判所ノ上席人又ハ裁判役トナリ裁判ヲ言渡ス時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

下吟味掛リ裁判役ニ付テモ亦此條ノ規則ヲ通シ用フ可シ

第二百五十八條　重罪裁判所ハ通常各州ノ首府ニ之ヲ設ク可シ

然レトモ控訴院ニテ更ニ他ノ地ニ之ヲ設ク可キヿヲ言渡スヲ得可シ

第二百五十九條　重罪裁判所ハ三月毎ニ其會議ヲ開クヿ可シ

然レ𪜈事務繁多ナル時ハ更ニ屢其會議ヲ開クヿヲ得可シ

第二百六十條　重罪裁判所ノ會議ヲ開クヿ可キ期日ハ其裁判所ノ上席人之ヲ定ムヿ可シ

其會議ヲ開キタル上ハ既ニ吟味ヲ為シ得可キ手續ニ至リシ總テノ重罪事件ヲ訴出（檢事長ヨリ）ヘシタル後ニ非サレハ其會議ヲ閉ツヿ可カラス

第二百六十一條　重罪裁判所ノ會議ヲ開キタル後ニ其裁判所附ノ留置場ニ入リシ被告人ハ檢事長ヨリ別段求メヲ為シ且被告人承諾シタル上ニテ上席人ヨリ言渡ヲ為シタル時ニ非サレハ其會議ニテ直チニ其裁判ヲ為スヿヲ可カラス

此場合ニ於テハ檢事長及ヒ被告人重罪裁判所ニ訴ヲ移ス重罪取調局ノ言渡（即チ重罪ヲ犯シタリト告クヿヲ言渡）ヲ取消サント訴フルノ權ヲ拋棄シタルト看做ス可シ

第二百六十二條　重罪裁判所ノ裁判言渡ハ法律上ニ定メタル所ニ循ヒ覆審院ニ上告スルニ非サレハ之ヲ取消サントト訴フ可カラス

第二百六十三條　若シ第三百八十九條ニ記スル如ク陪審ニ報告ヲ為シタル後重罪裁判所ノ上席人其職務ヲ行フヿ能ハサルニ至ル時ハ控訴院ヨリ出張シタル裁判役中ニテ最モ先キニ職任ヲ得タル者之ニ代ル可シ又控訴院ヨリ出張シタル裁判役アラサル時ハ初告裁判所ノ上席人之ニ代ル可シ

第二百六十四條　若シ控訴院ヨリ出張シタル裁判役ニ差支アリ又ハ失踪ノ時ハ其控訴院ノ裁判役之ニ代リ若シ其アラサル時ハ初告裁判所ノ裁判役之ニ代ル可シ若シ又初告裁判所ヨリ出張シタル裁判役ニ差支アリ又ハ失踪ノ時ハ其補役之ニ代ル可シ

第二百六十五條　檢事長ハ縱令其場ニ在ル時ト雖モ其代役中ノ一員ニ其職ヲ任カスルヿヲ得可シ

此條ノ規則ハ重罪裁判所ト控訴院トニ通シ

用フ可シ

○第一款　重罪裁判所上席人ノ職務

第二百六十六條　重罪裁判所ノ上席人ハ左件ヲ為ス可シ

第一　被告人重罪裁判所附ノ留置場ニ来ル時其申述フル所ヲ聽ク事

第二　陪審ヲ呼集メ之ヲ闔引ニ為ス事

但シ其上席人ハ其職務ヲ裁判役中ノ一人ニ任カスルヿヲ得可シ

第二百六十七條　重罪裁判所ノ上席人ハ陪審ノ其職務ヲ行フニ當リ之ヲ指揮シ其商議ス可キ事件ヲ辨明シ又其職掌ニ注意セシメ總テ吟味ノ時上席ヲ為シテ言ヲ發セントスル者ノ順序ヲ定ム可シ

其上席人ハ吟味ノ席ノ警察ヲ為ス可シ

第二百六十八條　又其上席人ハ事實ヲ見出ス ニ有益ナリト思料ス可キ諸件ヲ為スノ特權ヲ授カリ且其本心ト名譽トニ從ヒ事實ヲ見出ス ニ勉勵ス可キヿヲ法律上ニテ任セラレタル者トス

第二百六十九條　其上席人ハ吟味中證人ヲ呼出シテ其申述ヲ聽キ若シ其證人出席セサル時ハ引出狀ヲ出シ又吟味ノ席ニテ被告人又ハ證人ノ申述フル所ニ從ヒ更ニ事實ヲ明瞭ナラシム可キ證書類アリト思フ時ハ其證書類ヲ差出サシムルヿヲ得可シ

此條ニ記スル如ク吟味中上席人ノ命ニテ呼出サレタル證人ハ擔ヲ為スニ及ハス其申述ハ唯事實ヲ知ルニ付テノ見合ノ為メナリト看做ス可シ

第二百七十條　上席人ハ事實ヲ明瞭ナラシムルニ益ナク徒ラニ辯論ヲ永引カシム可シト思フ所ノ事ヲ制止ス可シ

〇第二款　控訴院ノ檢事長ノ職務

第二百七十一條　控訴院ノ檢事長ハ此卷第一章ニ定メタル法式ニ循ヒ重罪取調局ヨリ重罪ヲ犯シタリト告クル被告人ヲ自カラ重罪裁判所ニ訴ヘ又ハ其代役ヲシテ訴ヘシム可シ〇檢事長ハ重罪取調局ヨリ重罪ヲ犯シタリト告ケタルヨリ以外ノ者ヲ重罪裁判所ニ

訴フ可カラス若シ之ヲ訴ヘタル時ハ其訴ノ効ナク又別段ノ道理アル時ハ損失ノ償ヲ為ス可キノ訴ヲ受ク可シ

第二百七十二條　檢事長又ハ其代役證書類ヲ受取リタル時ハ直ニ吟味ノ為メ預備ノ書類ヲ記シ且重罪裁判所ノ會議ヲ開ク時ニ當リ双方ノ辯論ヲ為シ始メ得可キ摸様ニ至ラシムルヿニ注意ス可シ

第二百七十三條　檢事長ハ辯論ノ席ニ出テ被告人ヲ刑ニ處スルヿヲ求メ又重罪裁判所ヨリ裁判言渡ヲ為ス時立會フ可シ

第二百七十四條　檢事長ハ自己ノ職務ニ因リ又ハ裁判事務宰相ノ命ニ因リ檢事ニ其知ル所ノ軽罪犯ヲ訴フ可キヿヲ任ス可シ（第二十七條見合）

第二百七十五條　檢事長ハ控訴院又ハ官吏ヨリ差送リ又ハ平民ヨリ直チニ已レニ差出シタル罪犯申立書ヲ受取リ之ヲ簿冊ニ記シテ其申立書ヲ檢事ニ送達ス可シ

第二百七十六條　檢事長ハ法律上ニテ權ヲ授

リタル名義ヲ以テ其相當ト思料スル所ヲ裁判所ニ求ムル書面ヲ出レ裁判所ニテハ其書面ヲ受取リタル證書ヲ渡シテ其書面ノ趣ヲ商議ス可シ

第二百七十七條　檢事長ハ前條ニ記スル書面ニ姓名ヲ手署シ又辨論中其求ムル所ハ書記官之ヲ調書ニ記シ檢事長亦之ニ姓名ヲ手署ス可シ○檢事長ノ求ムル所ヲ裁決スル言渡書ハ上席人ト書記官ト之ニ姓名ヲ手署ス可シ

第二百七十八條　裁判所ニテ檢事長ノ求ムル所ヲ開届ケサル時ト雖モ其儘ニテ吟味及ヒ裁判ノ手續ニ取掛ル可シ但シ別段ノ道理アル時ハ裁判言渡アリシ後檢事長ヨリ覆審院ニ上告スルヿヲ得可シ

第二百七十九條　總テ司法警察ノ官吏ハ勿論下吟味掛リ裁判役ト雖モ檢事長ノ監督ヲ受ク可シ

第九條ニ記スル所ニ循ヒ其當然ノ職掌行政ノ事ニ管スルト雖モ法律上ニテ司法警察ノ

任ヲ受ケタル官吏ハ其警察ノ職務ニ付キ檢事長ノ監督ヲ受クヽ可シ

第二百八十條　若シ司法警察ノ官吏及ヒ下吟味掛リ裁判役其職務ヲ怠ルヿアル時ハ檢事長ヨリ之ヲ戒ム可シ但シ檢事長ハ其戒ヲ為シタル旨ヲ別段設ケタル簿冊ニ登記ス可シ

第二百八十一條　司法警察ノ官吏及ヒ下吟味掛リ裁判役再ヒ其職務ヲ怠ル時ハ檢事長之ヲ控訴院ニ申立ツ可シ

檢事長ハ控訴院ノ允許ヲ得タル上ニテ此等ノ官吏ヲ裁判役會議ノ室ニ呼出スヿヲ得可シ

然ル上ニテ控訴院ヨリ此等ノ官吏ニ向後更ニ其職ニ勉勵ス可キヿヲ嚴重ニ命令シ且檢事長ニ其呼出ヲ允許セシ言渡書ヲ寫シタル費用並ニ其呼出シノ費用ヲ此等ノ官吏ヨリ償ハシム可シ

第二百八十二條　前ニ記シタル官吏檢事長ノ戒メヲ為シタル旨ヲ簿冊ニ登記シタル日ヨリ一年内ニ更ニ其職ヲ怠リタル時ハ再ヒ怠

職シタルノ罪アリトス

第二百八十三條　檢事及ヒ上席人司法警察ノ官吏又ハ下吟味掛リ裁判役ノ職務ヲ行フ可キ權アル場合ニ於テハ其檢事及ヒ上席人犯罪ノ地ノ郡又ハ犯罪ノ地ニ隣スル郡ノ檢事又ハ下吟味掛リ裁判役又ハ治安裁判役ニ其職務ヲ任カスルヿヲ得可シ但シ被告人ニ對シ引出狀、禁錮狀、收監狀ヲ出スノ權ハ之ヲ任カス可カラス

○第三款　重罪裁判所ノ檢事ノ職務

第二百八十四條　第二百五十三條ニ記スル如ク控訴院ノアラサル州ニ於テハ檢事重罪裁判所ニ於テ檢事長ニ等シキ職務ヲ行フ可シ但シ此場合ニ於テモ檢事長ハ其職務ヲ行フノ為メ何時ニテモ重罪裁判所ニ出席スルヿヲ得可シ

第二百八十五條　檢事長ノ代役ハ其州ノ首府ニ住ス可シ（此條ハ別ニ廢シタル命令ナレトモ既ニ無用トナリシモノナリ）

第二百八十六條　州ノ首府ニ非サル地ニ重罪裁判所ヲ設クル時ハ檢事長ノ代役其地ニ移

住ス可シ（前條ニ等シク既ニ無用ノ箇條ナリ）

第二百八十七條　重罪裁判所ノ檢事ハ輕罪裁判所ノ言渡ノ控訴ヲ吟味シ及ヒ裁判スル時檢察官ノ職ヲ行フ可シ（第二百二條見合）

第二百八十八條　其檢事ニ一時差支アル時ハ〔其州ノ首府ノ初告裁判所ノ檢事之ニ代ル可シ〕（當時ハ〔印〕ノ間ノ文無用ニシテ現ニ行ハルヽ所ニ於テハ「其代役之ニ代ル可シ」ト改ム可シ）

第二百八十九條　重罪裁判所ノ檢事ハ其州中ノ司法警察官吏ヲ監督ス可シ

第二百九十條　其檢事ハ其州内ニテ吟味シタル重罪、輕罪、註誤ノ目録ヲ三月毎ニ檢事長ニ出シ又別段求メヲ受ケタル時ハ更ニ屢其目録ヲ出ス可シ

佛蘭西法律書治罪法二終

辻士革　校